

地域作業療法学を受講したにも関わらず
 地域作業療法に関わりたいと思わなかった理由
 —質問紙調査結果のテキストマイニング分析—

The reason why some former students did not want to work in community
 although they had attended class on community occupational therapy
 :A text mining analysis of questionnaire survey

田島明子 1) / 慶徳民夫 2) / いとうたけひこ 3)
 Akiko Tajima1) / Tamio Keitoku2) / Takehiko Ito3)

1) 聖隷クリストファー大学 2) 山形県立保健医療大学 3) 和光大学

キーワード：地域作業療法学、教育内容、混合研究法、テキストマイニング

I. はじめに

日本作業療法士協会は作業療法5カ年計画、第二次作業療法5カ年計画を策定し、地域生活移行・地域生活定着支援の推進をしてきた¹⁾。また、地域包括支援システムの構築を目的として作業療法士の活躍が期待されるなか、教育課程カリキュラムにおいても地域作業療法学の履修単位数の増加が検討されている。しかし現状では地域で働く作業療法士数は医療法関連施設で働く作業療法士数に比べ、圧倒的に少ない現状にある²⁾。

そこで本研究では地域作業療法の発展に貢献する地域作業療法学の教育方法の開発を目的とし、地域作業療法学を受講したにも関わらず地域作業療法に関わりたいと思わなかった理由を明らかにし、受講した学生が地域作業療法領域で働きたいと思える教材について考察を行った。

II. 対象と方法

1. 対象

山形県内作業療法士を対象とし、2016年7月に共同研究者が実施した「地域作業療法に対する意識と実践に関する調査」[449(回答数)、58.9%(回収率)]の結果を用いた。

2. 研究デザイン

本研究は、2つのデータセットを分析しているが、1つめの量的研究結果(対応分析)を2つめの質的研究結果(原文参照の内容分析)が補完している形態であり、混合研究法の「埋め込みデザイン」に該当する³⁾。

3. 分析方法

地域作業療法学受講経験有の265人のデータから、在学中地域作業療法に関わりたいと「思った」「思わなかった」、それらの理由についての自由記述データの使用語の出現頻度との関連についてText Mining Studioを用いたテキストマイニングによる対応分析を行った。なお、重要な名詞3語については原文参照データを用い、質的帰納的な分析を行った。

III. 結果

1. 地域作業療法に関わりたいと「思った」「思わなかった」人数とその理由に用いられた名詞

「思った」は170名(64%)、「思わなかった」は95名(36%)であった。「思った」の重要名詞は「生活」「地域」「対象者」であり、「思わなかった」の重要名詞は「イメージ」「具体的」「病院」であった。

2群各々で特徴的に用いられた名詞の上位3語の属性頻度(割合)と全体頻度、指標値(補完類似度)は表のとおりである。

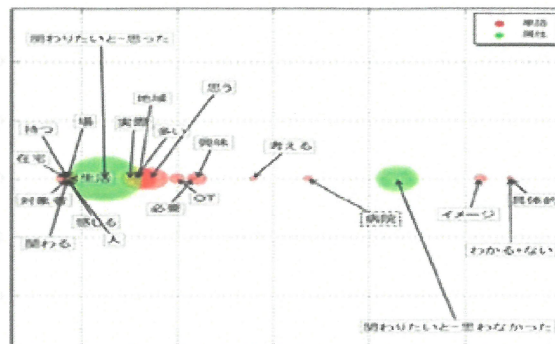
	重要名詞	属性頻度	全体頻度	指標値
関わりたいと思っ た	生活	56(100%)	56	35.792
	地域	72(84%)	86	24.115
	対象者	18(100%)	18	11.505
関わりた いと思 わな かった	イメージ	29(94%)	31	44.095
	具体的	17(100%)	17	26.598
	病院	12(55%)	22	12.384

2. 多重対応分析の結果

関わりたいと「思った」「思わなかった」2群と理由に用いた単語との関係を調べた多重対応分析の結果は図のとおりであった。

3. 原文参照による質的内容分析の結果

キーワードとなるような重要な単語5種類を原文参照し、その内容分析を行った。カテゴリは大カテゴリと小カテゴリが生成され、大カテゴリは【】、小カテゴリは<>とした。()内の数字はカテゴリに属する原文参照の文章数である。



●**生活(49)**：【生活支援の関心(35)】<生活支援の関心(21)><自立支援ができる場(1)><その人らしさを支援できる場(2)><地域に関わる人を巻き込んだ関わりへの期待(1)><ICF・参加への着眼の必要性の認識(1)><病院で行う機能回復訓練とは違った生活支援への興味・関心(3)><授業から感じた魅力(1)><生活支援の重要性の認識(2)><作業療法の特徴を活かせる場(3)>【対象者の生活の場が地域であり、地域への介入が必要(4)】【生活の場は地域である(10)】<生活の場は地域である(8)><在宅生活する高齢者が増えたため(2)>

●**地域(14)**：【病院・施設の枠を超え、地域で支援をしたい(12)】<病院や施設の枠を超えた支援をしたい(2)><主たる生活場所は地域だから(10)>【その他(2)】

●**対象者(17)**：【対象者の生活の場での支援は作業療法士らしい(5)】【地域は対象者の生活の場であり、地域での介入が必要(9)】【対象者のQOLを改善する支援ができるのが地域(3)】

●**イメージ(28)**：【イメージがわきにくかった(22)】<イメージがわきにくかった(12)><具体的なイメージがわからなかった(10)>【難しいイメージがあった(2)】【病院で働くイメージが強かった(4)】

●**具体的(16)**：【具体的なイメージがわからなかった(13)】【具体的に考えていなかった(1)】【具体的に何をしたらよいかわからなかった(2)】

●**病院(11)**：【病院で働くつもりだった(8)】【病院で働くイメージが強かった(1)】【病院以外での作業療法をイメージできなかった(2)】

IV. 考察

重要名詞の量的分析と原文参照による質的内容分析の結果から、地域作業療法学受講後「地域作業療法に関わりたいと思った」人たちは、①対象者の生活支援に関心を持ち、生活の場は地域であることから、地域での介入が必要である、②病院や施設の枠を超え、地域で支援をしたい、③対象者の生活支援に関わることは作業療法士の独自性を担うものである、と考えていたことがわかった。

また、地域作業療法学受講後「地域作業療法に関わりたかったと思わなかった」人たちは、①地域作業療法のイメージがわきにくかった、②難しいイメージがあった、③具体的なイメージがわきにくかった、④具体的に何をしたらよいかわからなかった、⑤病院のイメージが強かった、⑥病院以外での作業療法をイメージできなかった、と感じていたことがわかった。

これまで、診療報酬点数、介護報酬点数の制度的な状況を受け、作業療法士が医療機関での就労に誘導されてきた側面は否定できないと考える。今後、制度的にも、日本作業療法士協会の動向としても、作業療法士の地域での活躍をこれまで以上に推進していくことになる。そうした背景を踏まえ、現時点で地域作業療法学の教育内容を再検討することの意義は大きいと言える。

本研究の結果より、地域で働く作業療法士の増加のための地域作業療法学の教育内容として、地域作業療法についてのわかりやすく、具体的でイメージのわきやすい教材の提示が必要であると考えられる。また、地域での生活支援の作業療法の独自性や面白さを事例などで具体的かつ印象的に伝えることは、地域作業療法の魅力を伝えることになり、地域作業療法で働くことのインセンティブになると考える。

引用文献

- 1) 日本作業療法士協会：第二次作業療法5カ年戦略(2013~2017)。2013.
- 2) 日本作業療法士協会：作業療法白書2015。2015.
- 3) J. W. クレスウェル・他。大谷順子訳：人間科学のための混合研究法—質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン。北大路書房。2010.